

推進校別中間報告書

1 推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	児童数	備考
江田島市立柿浦小学校 <small>えだしましりつがきうらしやうがっこう</small>	広島県江田島市大柿町柿浦 1508-1	0823-57-2066	103	

2 研究課題

児童生徒自ら課題に取り組み、共に考え生きようとする道德教育の推進

3 研究主題とその設定理由

【研究主題】

『夢や希望をもって生きる子どもを育む道德教育 - 自己肯定感を高める道德の時間の創造 - 』

【設定理由】

子どもたちは、自然との出会いやまわりの人とのかかわり、学校・家庭・地域などの社会の一員として生きる中で、日々様々な体験をしている。そして、その一つ一つの体験を通して、物事を正しくとらえたり、善し悪しの判断を下したり、自分の言動を内省したりすることで、人間としてよりよい生き方へと自分を導こうとしている。このように、体験を積み重ねることは、人格の形成の上でたいへん重要な実践の場であるにもかかわらず、現在子どもたちには、自然・社会・生活場面において、物事に直接かかわる体験そのものが不足している。また、今日、情報化や核家族化、少子化などの社会の急激な変化や長引く経済不況の波は、子どもたちの心の育ちに悪影響を与えている。特に、家庭におけるしつけ不足や家族のふれあいの時間の減少などは、人間関係の希薄化を生み、子どもたちは「愛情を感じることができない」「自分の行為に対して自信がもてない」「自分の存在感を味わうことができない」といった、自分の存在を肯定できる安心感が育ちにくい状況がある。

そこで、本校では、児童が仲間や教師とともに学び合い、活動することを通して、自分がかけがえない一人の人間として大切にされ、自己存在感と自己実現の喜びを体感できるように、家庭・地域と連携した道德教育の充実を図ってきた。これまでの研究を通して、児童は道德の時間が楽しいと感じ、徐々にではあるが、自己を受容し、自己に好意を抱き、自己を尊重する自己肯定感が高まりつつあるように思われる。

道德の時間は、児童が自己を見つめ直し、道徳的価値についてじっくり考えたり、掘りさげたりしながら、自己を見つめる目を豊かにし、道徳的実践力を育成する時間である。自己肯定感は、児童一人一人にもともと内在するものであり、道德の時間を通して、自分の存在そのものの価値を一層実感でき、高まっていくものと考え。自己を見つめる目を豊かにしていくことが、自らの存在を肯定できる「心の貯金箱」の容量をふくらませていくことにもつながっている。これまでの研究の課題として、児童が体験活動での体験や追究したことが、道德の時間に生かされなかったことや、意図的に計画した体験活動そのものが、道徳的価値を意識できるものになっていなかったことが挙げられる。よって、児童が自己肯定感を体感し、人間としてよりよい方向へとベクトルを伸ばしながら、夢と希望をもった生き方ができるように、様々な体験と道徳的価値とがより密接に結びついた教育活動を進めていく必要がある。

そこで、本年度は体験活動と道德の時間との関連をより密なものにするために、奉仕活動、自然体験、社会体験、幼児・高齢者・ハンディキャップのある人との交流といった豊かな体験を通して、児童の内面に根ざしつつある道徳性を一層育んでいきたい。また、児童の生活の基盤である、学級や学校での集団活動のさらなる充実・向上を目指すことで、児童の自己肯定感を高め、児童の「心の貯金箱」の容量を増やしていきたい。そして、児童の体験と道德の時間における道徳的価値の自覚とが相互に響き合い、児童自らが心を育て、よりよく生きようとする道徳的実践力につながる道德教育を推進していきたいと考え、研究主題を設定した。

4 第1年度の研究の特色及び概要

(1) 体験活動と響き合う道徳の時間の在り方 道徳の時間の年間指導計画の創意工夫

<表1>

学期	実施月日	指導 時間数	主題名	資料名	内容項目	保護者 GT TT
1	4月15日	1	心をそっとのぞいてみよう	今日から三年生 (自作資料)	1-(1)	
1	4月22日	1	みんな仲良く助け合おう	友だち のびゆくこころ(日本書籍)	2-(3)	
3	2月18日	1	みんなのために	だいこんあらい 3年生のどうとく(文溪堂)	4-(2)	
3	2月24日	1	命あるものを大切に	目の見えない犬 みんなのどうとく(学研)	3-(1)	TT
3	3月1週	1	命いっぱい生きる	おばちゃん、がんばれ みんなのどうとく(学研)	3-(2)	GT
3	3月2週	1	努力し続ける心	十八才で一年生 3年生のどうとく(文溪堂)	1-(3)	保護者
3	3月3週	1	自分のことは自分で	パトミントクラブ 3年生のどうとく(文溪堂)	1-(1)	TT

ねらい等を含めた展開の概要を別紙にて作成している。

指導者が、年間を通して見通しをもち、道徳の時間の主題と他教科・領域での体験活動や日常生活とを関連させ、相互に生きてはたらくように、<表1>のような道徳の時間の年間指導計画を立てた。年間推進計画を表にしたことで、チームティーチングでの授業・保護者参加型・ゲストティーチャーを招聘した授業の計画にも見通しをもつことができるようになった。また、定期的に見直しを行うことで、弾力的な計画となるように留意した。

道徳の時間の創意工夫

チームティーチングによる指導の充実のために様々な学習展開を工夫し、実践してきた。資料提示の工夫だけでなく、価値の類型化の後の話し合い活動において、児童の意見交流の輪の中に入り、同じ判断でも、価値の自覚に違いがあることをつかむようにしたり、ふるしきでものを包むという日本の伝統文化に直接ふれる活動を取り入れて、日本のその他の伝統文化にも関心をもてるように工夫したりした。



チームティーチングでの授業の様子



児童の内面に道徳的価値を深く刻み込むことに効果のある保護者参加型授業、ゲストティーチャー(GT)を招いての授業も実践した。

保護者参加型授業では、まず教師がなぜ保護者に参加してもらうのか、授業で何をねらい、どんなことを児童に考えさせたいのかははっきりさせてから、保護者との事前の打ち合わせを綿密に行った。保護者との打ち合わせを通して、ねらいを共通理解し、ともに授業をつくっていくという雰囲気自然にできあがった。そして、効果的な役割演技や説話となるように模擬授業を行うことで、児童の反応を予



保護者との役割演技の様子



GTの効果的な説話

想し、ともに授業展開を意識した上で本番の授業に臨めるようにした。

また、ねらいとする道徳的価値に迫り、授業を魅力的にするために、地域の方をゲストティーチャーとして招聘し、授業を行った。とくに道徳的価値にかかわって、ゲストが体験してきたことを児童の心により響かせるために、ゲストの体験を資料にしたり、話をしてもらうようにした。

各教科、特別活動、総合的な学習の時間、学校行事などとの関連

道徳の時間のねらいと、他教科・領域とのねらいを関連させて、道徳的価値が有機的に広がり、児童の心により刻み込まれるように工夫した。道徳の時間と他教科・領域との関連を明らかにするために、関連構想図を立て、実践することで、道徳的価値の自覚の高まりを実感させるとともに、自己のこれからの生き方の指針となる体験活動を多く仕組むことができると考えた。

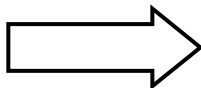
<実践例>

テーマ「苦難をつきぬけ、夢と希望をもって生きる。」5年生



道徳の学習の時間
2 - (3) 信頼・友情
資料名「友の肖像画」

友のことをいつも信じていくことが大切なんだ。



総合的な学習の時間
「チャレンジ！ソーラン」
の学習

友だちと、互いに助け合いながら練習していくぞ。

自己研修課題

今年度は「体験活動と響き合う道徳の時間の在り方」という研究のひとつの柱に基づき、各教

師のこれまでの道徳の時間の取組みを振り返り、今後の道徳の時間の充実と授業の向上に向けて各自で研究課題を立て、実践した。そして、年度末に研究の成果と課題を明らかにし、実践を発表し合うことで、来年度の研究に向けての課題を焦点づける材料となるものを探ることにした。

(2) 家庭・地域社会との協力体制づくり

学校だよりや学級通信、学校ホームページなどを通して、児童の学習や活動の様子を家庭・地域に幅広く知らせるとともに、本校のすすめる道徳教育への理解と協力をお願いした。また、11月の地域公開において、全学年の道徳の授業公開を参観してもらう機会を設定した。

本校の道徳教育推進についての理解と協力を得るために、PTAや民生委員、老人会などの校区の方々をメンバーにし、2年前に発足した「道徳推進ネットワーク」の一層の充実を図った。とくに会員を中心に、クラブ活動の講師や、読書ボランティア「夢のつばさ」の読み聞かせなど児童と積極的にかかわってもらったり、地域での児童のがんばりを評言活動してもらったりすることで連携を図っていった。また、道徳の時間のゲストティーチャーや、道徳的価値と関連した体験活動にいつでも参加してもらい、児童の学習の様子や実態を常に知ってもらうようにした。

(3) 「12歳の挑戦状」の学習プログラムの研究・開発

今日的に夢や希望がもてない児童が増えているという現状をふまえ、児童が自己肯定感を体感し、人間としてよりよい方向へとベクトルを伸ばしながら、夢と希望をもった生き方ができるようにするためには、自己を見つめる能力をもつことが必要であると考えた。

そこで、言葉を通して自己の内面を見つめ、生き方を映し出す手だての一つとして『言葉と道徳』という観点から「12歳の挑戦状」という学習プログラムを研究・開発した。

5 第1年度の研究成果及び課題

< 成果 >

道徳教育は、学校・家庭・地域が一体となって進めるという観点から、今年度も『保護者参加型』の授業を計画し実践したことで、保護者の道徳教育に対する意識が一層高まった。とくに、授業後の保護者の「やってよかった。」「またやってみたい。」といった反応が、我が子を見る目に変化をもたらし、家庭での肯定的評価をもたらすようになった。

道徳の時間と他教科・領域との関連を重視し、子どもの心に響く自然体験・社会体験・感動体験を道徳の時間のねらいとかかわらせ、意図的に仕組んできた。このことで、昨年度までの課題であった自分の経験を振り返る活動において、徐々に話し合いが深まるようになりつつある。

各教師の授業力を高めるために研究テーマに沿った自己研修課題を設定し、研究に取り組んだ。それぞれの課題を焦点化し、継続して研修を深めたことで成果と課題が明らかになり、今後の授業実践に見通しがもてた。

今日的に夢や希望をもてない児童が増えているという現状から『ことばと教育』という観点で『12歳の挑戦状』の学習プログラムを開発した。夢や希望をもたせる取り組みによって、将来の目標の引き出しを多くもつことができるようになった。引き出しをもつことで、将来のビジョンに希望がもてるようになった。

12月に実施した児童の意識調査のアンケートの考察から、次のようなことが考えられる。

- ・ あいさつは全校8割以上の児童が肯定的評価を回答している。これは、各月ごとに生活目標に位置づけ、取り組んできた成果が表れたと考える。このことで、地域の方からも肯定的な評価を受け、それが自信につながり、一層あいさつに取り組もうとする姿勢を生み出した。
- ・ あいさつ同様に、そうじについても毎月の生活目標に掲げ取り組んできた。アンケート結果においても、全校8割以上の児童が肯定的評価を回答している。しかし、人のためになることを進んで行っているという意識が高学年なるほど低くなっている。そこで、人のためになることや勤労奉仕の態度を養うために、また、自分の役割は最後まで責任をもってやり抜くという意識を高めるために、3学期から同じ場所を1ヶ月間そうじすることを実施してきた。この取り組みで、児童の内面に責任感が生まれ、児童から「この掃除場所は自分が任せられているので、やりがいある。」という声が聞かれるようになった。
- ・ 何でも話せる友だちがいると肯定的に評価している児童も全校8割以上いる。児童の内面には、お互いのよさを見つけあい、認め合っていこうとする意識が芽生えつつあると考える。このことから集団の一員としての存在感や、自分のよさを見つける手だてとして、児童同士の評言活動の重要性が明らかになった。

< 課題 >

成果の中で述べたように、夢や希望をもつことができるようになってきたが、それを児童自身に「自分はできる!」と実感させるためにも、より多くの体験活動を意図的・計画的に行い、自信をもたせていくことが必要である。

自らの伸びが実感できるように、一時間一時間の道徳的価値に照らし合わせた振り返りとともに、自分がどう変わったのかも振り返ることができるように、資料やワークシートなどをファイリングしていくことが必要である。(ポートフォリオ作成)

豊かな心の基礎作りとしての評言活動や読書活動のさらなる充実を通して、児童が考え、感じたことを児童同士が共感しあう能力を高めていく必要がある。

教師自身が教材研究を進めていくうちに資料から感動したことを、授業において児童の内面に熱く伝え、共有しあうことで、児童の道徳的実践意欲に高まりが見られた。このことから、常に児童の内面に深く残り、道徳的価値の自覚を深めることができる授業を創るためにも、資料開発や教師の実践的指導力を高めていくことが必要である。

道徳の授業を質的に高めるためには、児童の主体性を育て、自信をつけさせる必要がある。そこで、支持的風土のある学級づくりや特別活動の充実が今後の課題である。

6 参照できるホームページアドレス

<http://www.urban.ne.jp/home/kakiuras/>